

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 〈半西洋〉文化研究への〈半西洋〉人の貢献： 『歴史の山脈』を越えて

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2009-04-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 落合, 一泰<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00001667">https://doi.org/10.15021/00001667</a>                  |

## 〈半西洋〉文化研究への〈半西洋〉人の貢献

——『歴史の山脈』を越えて——

落合 一泰

一橋大学大学院社会学研究科

- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 1. はじめに                 | 3. 〈半西洋人〉研究者というポジション |
| 2. 調査団のふたつの性格：文化人類学・集団性 | 4. 「メスティソ美術」の脱構築     |
|                         | 5. おわりに              |

### 1. はじめに

筆者はメキシコの文化人類学を専攻しており、アンデス学については門外漢である。にもかかわらず、関雄二氏から公開シンポジウム「歴史の山脈——日本人によるアンデス研究の回顧と展望——」（2004年2月21日、於国立民族学博物館）開催の通知を得たとき、すぐに出席の旨を返答した。1972年にメキシコでお会いして以来、30年以上お付き合いいただいている藤井龍彦氏の退官を一緒にお祝いしたいという気持ち、同学の方々の発表に刺激されたいとの期待、そして「日本人による研究」という主題への関心が強かったからである。シンポジウムでは数々の発表に触発されたが、専門家でないため、細部にわたるコメントができない。そこで、「日本人による研究」という切り口から、若干の感想を述べたいと思う。

### 2. 調査団のふたつの性格：文化人類学・集団性

過去約半世紀、日本のアンデス研究の中核を担ってきた東京大学・埼玉大学アンデス調査団は、学術的には文化人類学を主軸とし、組織的には調査団という集団性を特徴としてきた。両調査団では、アンデス文明形成期研究に力点を置いた先史学が活動の中心を占める。しかし、その先史学研究が文化人類学という大きな枠内で推進されてきたことが、両調査団の広がりある学風を形作ってきた。文化人類学の旗印のもと、隣接分野間の交流が豊かな実りをもたらしてきたことは、大貫良夫氏の発表「日本のアンデス調査45年」においても強調されていた。

調査団という集団事業には、統制上の困難や苦勞が伴うこともあろう。しかし、両調査団の場合、調査団方式が効率的に働いてきたからこそ、長期継続が可能だったにちがいない。ペーター・カウリケ氏は、発表「日本人によるペルーの考古学研究の重要性」において、日本人研究者の仕事には、アメリカ合衆国などの研究者とは異なる、ある共通の一般的傾向があると指摘した。そのひとつは、「目的を達成するために調査を継続的

に実施し、常にデータをまとめ、その重要な成果を出版してきたこと」である。集団のなかで個人を活かす方法を社会的に案出発展させてきた日本社会を背景に、調査団という形式が良い方向で機能しえたこと、全員の参加を得て詳細かつ総括的な出版をおこなって初めて調査は完結すると考える美意識が作動してきた結果であろう。これは、アンデス研究のみならず、日本の他の多くの調査団の仕事についても言われてきた特質である。

比較は難しいが、この点は欧米の研究者による個別的属人性の強い研究体制とやや趣を異にする。民族学の分野だが、メキシコ南部チアパス高地で1958年から約25年間にわたり調査団を継続したハーバード・チアパス計画の場合、個人調査の組織化とその集積という性格が強く、大学院生のトレーニングにおいても、何人が個人研究者として博士論文を書いたかという話になることが多かった<sup>9)</sup>。

### 3. 〈半西洋人〉研究者というポジション

友枝啓泰氏は、「民族学からの回顧——アルゲータスの亡霊」と題する発表に先立ち、ふたつの懸念を表明した。ひとつは、シンポジウムが「日本人によるアンデス研究の回顧と展望」というテーマを掲げた点である。研究は世界に開かれたものであるから、国籍による限定は不要であろうというのが氏の立場であった。もうひとつは、発表の副題「アルゲータスの亡霊」が示すように、ホセ＝マリア・アルゲータス以後のアンデス民族学が、その複雑なインディオ観の束縛から自由になっていないのではないかと懸念であった。

後者については、確かにいくつかの発表にそれを感じることはあったが、シンポジウム全体をおおむね雰囲気ではなかったと思う。むしろ、「亡霊」から自由な質の高い研究があいついだことが印象的だった。しかし、ここでコメントしたいのは、とくに前者についてである。「日本人によるアンデス研究」の総括と評価がシンポジウムの狙いだったことは確かだが、筆者は、「日本人による」研究を強調することが無用な境界線を設けると懸念より、そうすることにより別の普遍性に向かう道がむしろ拓けていく可能性を、数々の発表を聞くうちに感じた。それは、〈一定程度西洋化した非西洋圏の近代社会〉に属する日本人が、別の脈絡でやはり〈一定程度西洋化した非西洋圏の近代社会〉であるアンデス社会を研究するということに関わる意味や意義である。

〈一定程度西洋化した非西洋圏の近代社会〉とは何か。西洋化・近代化の波が世界を広く覆った結果、現在の地球上において、西洋文明と無縁であり続ける〈純粹非西洋〉は、もうほとんど存在しない。また、非西洋圏と一切関係を持たない〈純粹西洋〉を想像することも難しくなった。〈純粹非西洋人〉や〈純粹西洋人〉は、いたとしても数的に少数派であり、世界人口の大半は複数の文化を内包する〈半西洋人〉である。たとえ地理的に西洋から遠く離れていようと、彼ら非西洋圏の現代人は地元の文化を維持しつつ近代

西洋文化も吸収して生活している。たとえばニュージーランドのマオリ人、日本人、ラテンアメリカ各地の先住民、ケニアのカンバ人などは、西洋文化の受容の仕方こそ異なるが、いずれも〈半西洋〉という現実を生きている。もちろん、〈半西洋〉とはちょうど半分だけ西洋文明で、残りは地元文明という意味ではない。また、どちらも中途半端という意味でもない。両者が混交ないし並立している、むしろダブルと呼んだほうがよいような状況を一般的に指す概念として、〈半西洋〉という言葉を提案したいのである。

現代日本は、複数の文明を抱えるそうした非西洋圏近代社会のひとつである。日本で幼少期から生活すると、少年少女文学から教育、娯楽にいたるまで、あらゆる場で西洋文明に親しみ、それを血肉化させていくことになる。それを抜きにしては、現代日本人は成立しないとさえ言えるだろう。とは言え、西洋文明に親しんだからといって、日本社会の文化的価値観が心身から離れていくこともあまりない。外部すなわち非西洋が現実のかなたにある西洋圏では、移民的背景でもないかぎり、このような〈半西洋〉的な文化感覚を身につけることは難しいようである。そこが、外部すなわち西洋の存在を当然の前提としている非西洋圏近代社会の〈半西洋人〉とは異なる。

このような文化環境で育った日本の研究者が、西洋文明と先住民文明を複合的に保持してきたアンデス社会を研究するとしたら、また、無意識的にこの〈半西洋人性〉を背景として特色ある研究を生み出しているとしたら、それは新たな別種の普遍性に向かう「日本人による研究」になりうるとは言えないだろうか。西洋という外部をある形で内部化してきた日本の研究者が、西洋という外部を別の形で内部化してきたアンデス世界に接するとき、アンデス世界を外部として見つめてきた西洋の研究者とは異なる視点が、そこに拓けてくる可能性があると思う。

#### 4. 「メスティソ美術」の脱構築

本シンポジウムにおいて、私はそれを岡田裕成氏の発表「アンデス植民地美術史と『メスティソ』概念——自己と他者の表象をめぐる歴史の屈折」に感じた。岡田氏は、「メスティソ美術」という考え方を、「国民的美学」を基礎づける芸術的独創性としてエリート層が創出した現実感覚であると捉える。そして、岡田氏は、「メスティソ美術」の生産に当然深く関与したはずの先住民やメスティソ自身が、思想としての「メスティソ美術」から排除されてきた事実を指摘する。また、植民地時代のメスティソ芸術家は、期待されるエキゾチックな役割を熟知した上で、それを演じていたとも言う。したがって、言説としての「メスティソ美術」と芸術表現としての「メスティソ美術」がたいへん複雑な政治的関係にあることを直視した上でなければ、この美術ジャンルを研究することは難しいと岡田氏は結論する。

これは、メキシコ革命以後に国家文教施策の基盤思想となったインディヘニズモ（先

住民主義)をめぐる社会状況に似ている。このインディヘニズモは、先住民文化の尊重と権利の回復・保証を主軸とし、近代化から取り残された先住民インディオを、進歩思想と温情主義により、国民統合に向かわせようという思想であり政策だった。しかし、先住民主義とはいえ、それは先住民自身のイニシアティブで勝ち取られた政策ではなく、首都メキシコシティの政治家・芸術家・学者などが革命後の国民統合を模索するなかで策定するに至った、先住民抜き運動であった。その意味で、メキシコ革命の成果と位置づけられることの多いインディヘニズモは、じつは革命が打倒したポルフィリオ・ディアス政権下における、ネオ・アステキズモ、ネオ・トルテキズモと呼ばれた国家精神としてのインディヘニズモの延長上にあつたのである(落合1998)。また、革命後の先住民は、それを承知の上で、当面の利益確保のために一定の範囲において〈先住民主義者の先住民〉を演じてきた。一定の範囲においてというのは、社会的進歩が先住民社会に十分配当されていないことに彼ら自身敏感であつたからであり、第二次オイルショック以降のネオ・リベラリズム政策がメキシコ政府に温情主義的補助金の削減を迫つた結果、先住民がインディヘニズモ自体を否定するに至つたからである。メキシコ南部チアパス州で武装蜂起したサパティスタは、その具体的な例である(落合1997)。

岡田氏のようにひとつの国家的言説の脱構築を試みることは、当の社会(この場合はアルゼンチン)では意外に困難かもしれない。このような指摘は、西洋からの差別化と国家統合に向けて「メスティソ美術」を主唱した、西洋人を自認する非西洋圏近代社会のエリート層には、必ずしも快いものではないからである。人類学は、自己、他者、両者の関係がどのように理解されるかをめぐる学問である。ところが、近代西洋の学問言説は正確な理解に重心を置くあまり、誤解、ステレオタイプ、自己演出、理想化などを最初から否定し、それ自体を問題系として取り上げてこなかった。しかし、これらを自他理解の形式として受け入れてはじめて、言説の歴史過程も明らかにする。それは、正確な理解のみを価値としてきた近代西洋の科学主義者には、受け入れがたいことなのかもしれない。そのような点は、むしろ日本人のような外部の〈半西洋人〉研究者のほうが指摘しやすいと思われる。

筆者自身にも似た経験がある。あるシンポジウムで〈半西洋〉概念を説明したあと、ラテンアメリカ人研究者自身が自己の〈半西洋〉性を意識し研究を進めていくことが新たな学術パラダイムの創出に結びつくのではないかという趣旨の発言をしたときのことである(Ochiai 2003)。出席していたフランス、イタリア、スペインの研究者からは賛意を得たのだが、肝心のアルゼンチン、メキシコの研究者から強い反発を喰らつた。自分たちは西洋文明人として正しい理解を目指しているというのである。それは分かっているが、戦略的に自己のポジションをずらしていかないかぎり、近代西洋言説を乗り越えることは難しいのではないかと反論したのだが、十分に意を伝えることができなかつた。筆者の言葉足らずもあつたのだろうが、ラテンアメリカの知的エリートの西洋的基盤が

先住民世界のそれと大きく異なるだけでなく、それがときに相当強固であることを実感させられた。岡田氏が自分の主張を今後どのようにアルゼンチン人に伝え、またラテンアメリカの文化言説に関わる一般的テーマとして敷衍していくかに、筆者はおおいに期待したい。

## 5. おわりに

人類学は、西洋が非西洋を見つめる近代的学問として欧米で成立した。それを受容し発展させてきた日本の人類学が昨今の新しい人類学の流れのなかで独自性を模索し、また普遍的な場で議論していくには、たとえば〈半西洋〉という概念を手がかりとすることが有効ではないかと筆者は考えている。ポストモダン概念として〈文化的ハイブリディティ〉という視点も提案されているが (García Canclini 1990)、ときに言語化の困難な非西洋の近代経験を西洋言語の近代的明示性に転換し分析の俎上に上げていくというその強引さは、なお意識されることが少ない<sup>2)</sup>。認めなければならないのは、私たちが学術言語としては近代言語の分析の世界しか共有しておらず、その世界を離れることが困難だという事実である。試行錯誤に対しては、文学的すぎるとのレッテルが貼られることも多く、そのため、人類学においては西洋的言語に代わるオルタナティブの模索は棚上げにされたままである。

この根本的問題に対し、日本語を基盤としつつ欧米語でも世界に研究成果を発信し続けてきた日本のアンデス研究者が今後新たな視座を提起していくことを、筆者は待望したい。

## 注

- 1) ハーバード・チアパス計画を立案運営したのはイヴォン・Z・ヴォートであった。アメリカ合衆国では長期の民族学プロジェクト自体が珍しく、ほとんど離脱者を出さずに本計画を運営し終えたことは、ヴォートの手腕であった。ハーバード・チアパス計画についてはVogt (1994) を参照。指導を受けた一人として、2004年5月13日に亡くなったヴォート先生のご冥福をお祈りしたい。
- 2) 近代西洋言説の明示性志向とその限界についてはOchiai (2005) 参照。

## 文 献

García Canclini, Néstor

1990 *Culturas híbridas: Estrategías para entrar y salir de la modernidad*. México: Editorial Grijalvo, S.A de C.V.

落合一泰

- 1997 「〈征服〉から〈インターネット戦争〉へ——サバティスタ蜂起の歴史的背景と現代的意味」中林伸浩編『紛争と運動』pp.137-167, 東京：岩波書店。
- 1998 「啓蒙主義の誘惑と拘束——〈理想都市〉メキシコシティの建設」山内昌之編『開発と民族問題』pp.207-234, 東京：岩波書店。

Ochiai, Kazuyasu

- 2003 Dilemma dell'identità: Difficoltà dei semi-occidentalizzati nella società moderna. In *Simposio internazionale: Gli indigeni messicani oggi. Protagonisti e dinamiche dell'identità etnica*, pp.8-9 maggio. Roma: Università di Roma "La Sapienza".
- 2005 *Livin' la vida glocal: La autoconciencia de los japoneses y el mundo occidental*. In Javier González Luna (ed.) *Kooten*. Bogotá: Universidad Javeriana. Bogotá: Universidad Javeriana.

Vogt, Jr., Evon Z.

- 1994 *Fieldwork among the Maya: Reflections on the Harvard Chiapas Project*. Albuquerque: University of New Mexico Press.